中国浙江省寧波市象山県の近年の変貌

高知大学名誉教授　大野正夫

浙江省・寧波位置図

上海市内から自動車道を走ると2時間ほどで、銘酒・紹興酒の里、孫文の生地や西湖で知られている杭州（こうしゅう）市である。さらに1時間ほど海岸線に向かった走ると、浙江省・寧波(中国語：ﾐﾝﾎﾟｳｰ)市に着く。日本人にはあまり知られていない地名であるが、寧波市は、中国で最大の湾ではある杭州湾を持ち離島が多い。人口は786万人である。

かつて中国に渡った遣隋使や遣唐使あるいは宋の商船などは、ここの港に着いた。寧波はかつて明州（めいしゅう）とも呼ばれ、中国有数の港町として発展してきた。観音信仰の聖地・普陀山（ふださん）や仏舎利（ぶっしゃり）信仰の聖地・阿育王山（あいくおうざん）などがある。また日本禅宗（ぜんしゅう）の草創期に活躍した祖師（そし）たちが学んだとされる天童山（てんどうさん）も寧波を代表する禅院である。寧波市の輸出入の貨物量は中国の首位と言われ、貿易都市であり，また商工業都市でもある。杭州湾から長安まで、610 年に大運河が建設されて、空海はこの運河を登り長安に着いたと言われる。いまでも、この運河は物資の輸送に使われている。

象山県（日本語：ぞうざん・けん、中国語：ｼｬﾝｾﾝ、県が中国語略字）

寧波市中心部から象山県を示す自動車路の位置図

近年、ミンポー市内から象山県に接する深い湾に橋が架かり、自動車道で、約3時間で象山県に行ける。架橋により、この20年間で経済活動が急速に発展し、農林水産地区と工業地区になった。さらに、2000 年以降に中国政府の国策で、農林漁業、工業、海浜観光保養地としての複合開発が行われた。特に象山県半島の浙江省寧波市象山県（具）は、東シナ海に浮かぶ漁山列島や

湾口からみた象山県

韭山列島などを含む。象山県の南西部に象がしゃがんだ形の象山がある沿岸部の景観が、20年の間に大きく変貌した。

朱文榮氏は上海海洋大学を卒業後、1998～2001 年で高知大学大学院修士課程を終え、その後青海苔加工研修員留学をして帰国し、3 年間青海苔企業に勤務した。青海苔の連続乾燥機の特許を取り、2003 年に上海海洋大学の友人達と象山旭文海藻開発有限公司を立ち上げた。

朱　文榮

筆者は彼を指導したので、2000 年から、たびたび象山県を訪問して、漁村の変貌をみて来たので、中国の地方都市の変貌を報告する。左の写真は、朱文榮氏が 2023 年にテレビで、象山の海藻産業を紹介した時の映像である。

中国では県の名称は、日本の「町」に当たる。しかしながら、象山県の人口は約57万人である。現在、中国の農漁民一人当たりの年純収入は、統計資料によると 18,127 元（一元は20円）となっているが、象山県の漁業者家族の年収や生活は日本漁業者家族とあまり変わらないように感じる。ただ、家族のほとんどは共働きである。

海藻産業の発展と漁業者の生活環境の変化

ミンポー市の奉化の沿岸は多くの川が流れ込み、図に示すように大量のアオノリが繁茂していた。日本の青海苔業者は、国内青海苔がポットチップなどのスナックに付けられて需要が増し、全漁連と交渉の結果、中国から青海苔の輸入枠が 100 トンと認可された。日本の青海苔業者は奉化地域の青海苔を日本に輸入したいが、漁業者に採取や加工法を指導しても雑物が多くて、日本で販売できる製品にならなかった。そこで、日本でアオノリを学ぶ中国の留学生を招いと要望が筆者にあった。朱文榮氏は、上海海洋大学卒業時であったので、高知大学大学院修士課程でアオノリの生態学の研究をテーマにした。その後、高知県下の四万十川町にある（有）加用物産㈱で、青海苔の加工と梱包や販売を学ぶために、研修員留学制度で 1 年滞在し、3 年間、日本での青海苔の生態から、日本の青海苔加工を学んだ。

当時中国では、青海苔は、ミンポー地方の特産品食材であった。ミンポー地方は、収穫したアオノリを川の水で洗い、天日干しであった。青海苔は、油炒めしたピーナッツと青海苔を載せて出された。多くに会食には、“つまみ”として、よくされていた

ピーナッツと青海苔

朱氏は、青海苔の洗浄を谷川水と井戸水を使って、付着物を取り除いた。洗浄し青海苔は従来の天日乾燥から、海苔の全自動式乾燥機からヒントを得て、青海苔全自動乾燥機を作成し、特許を受理した。付着菌数も輸入品の基準をクリアした。全自動乾燥であり、1 日の青海苔の生産は、1 あたり1トンで、それを青海苔粉末にした。漁業者には良い品質を高く買った。収入が増えることにより、漁業者の収穫態度が変わった。ローカルな食材の青海苔で、需要もわずかであったが、青海苔の生産量が増えるにつれて、朱氏は青海苔の販路をスナック類への利用に拡大していった。現在、日本への輸出を含めて年間 100 トンほどの青海苔

を生産している。

1998 年に、象山を訪れた時は、レンガ造りの小さな家が並ぶ、中国の典型的な漁村の家並みであった。家の隅にはゴミくずがたまっているのが気になった。翌年に訪れた時は、一見、路がきれいになっていた。朱氏に尋ねると、いま、象山は町全体で「美化運動」が行われていると言った。この頃から、象山の街は大きく変貌する機運が起きたのかもしれない。

天然アオノリの収穫

アオノリの天日乾燥

青海苔の機械乾燥

象山旭文海藻開発有限会社

奉化県と象山県に橋が架かり、象山県は大きく変貌

架橋の手前が農業地帯であり、漁村は上方右側である

上方の地域が奉化県で、手前が象山県である。架橋により魚介類・海藻の販路に掛かる時間がが上海まで、2～3 時間の距離となり、漁業が活況を呈した。漁業者の事務所となっていた建物も新築された。以前は漁港内の道は舗装されていず、歩くには長靴を履いていないと滑って危なかったが、今は舗装になされており、港内も全てがきれい整頓されていた。ゴミくずはなく漁業者の心構えが替わってきた。古い中国人という固定概念を持って物事を判断することは、今はよくな

い。

漁業者家族の食卓にも変化が見られた。中国人は海苔のスープは伝統的に食するが、海藻はほとんど食べなかった。コロナ禍前の 2018 年に、漁業者達と一緒に昼食を共にしたが、昆布に魚肉の入った料理があり、海苔のスープの中に魚肉が入っていた。現在中国の食用昆布は、約50万トン（乾燥）である。日本の昆布の消費量が4万トンである。中国では、古来日本からの輸入昆布は薬草で、高価であった。中国人が昆布を食べ始めたのは、1980年代からである。その頃は、塩漬けで水産物コーナーに丸く巻いて売られてた。今はスーパーで、日本と同じように、乾物コーナーで売られている。最近はワカメもスーパーで売っており、ワカメスープとして食べるようになった。。子供たちは、味付け海苔が好きだそうだ。日本人家庭より中国人家庭の方が、食事への順応が
早いように思えてきた。

昆布養殖場の収穫風景

昆布の乾燥風景

2010 年漁村の家屋が建設中

2018 年　整備された道路と家並

下方の写真は、象山漁村の鳥観図である。朱文栄氏から届いた写真である。最新の写真と思われるが、海に面したところが漁村であり、周囲の建物は工場である。この地区は、中国政府の漁業、観光と工業を一体化したモデル地区となっている。

2010年にこの漁村を訪れた時は、街が大きく変わりつつある時であった。まだ道の舗装が充分でなく、2階建ての建物が、建築中であった。これらの家が、漁民の住宅であると言われて、驚いた。

1983年に国際会議が青島（チンタオ）にあったが、丘にドイツ風の建物が並び、海岸線は平屋のレンガ造りの漁村であった。

2018 年にこの地を訪れた時には道路が広く、北欧に来たような気持ちになった。この街づくりに中国人が満足しているかどうかはわからない。

作業服で、家に入りにくいのではと思ってしまう。ただ、漁業者の生活が良くなった。昆布養殖や海苔養殖は、1980年代にはなかった。新しい収入源が出来た。日本の海藻業者は、中国の
海藻類が高くなって、輸入のメリットがなくったという。中国の物は、安いという時代は終わったのである。このような漁村は、浙江省の漁村で、消費地に近い利点である。
最近の中国の光景は、高層ビルが乱立している写真が多く、昔の中国の光景を懐かしいが、地方でも、このような政策が進められいる。
大都市に近い漁村に、工場を誘致して共存させるこのような考えは、まだ日本にはない。発展途上中の中国の施策ではあるが、人口減少に悩んでいる高知県でも、このような大胆な構想は企画されてもよいのではないかと思うようになった。中国では、農地の中に工場があったりして、驚くが
食糧の移動を考えると、漁村、農村、工場があれば、衣食住が近く、効率的かもしれない。
この写真の周辺の工場地区に、朱氏グループの植物工場があり、野菜や花卉を栽培している。

象山市街地の変貌

2008 年に象山市内のホテルに一泊した時の部屋からの撮った写真が左の写真である。街路樹の後ろにある昔の建物が壊されてゆくのをみた。隣にはすでに高層ビルが建っていた。私は広い道、街路樹、2 階建ての家並が消えてゆくのは残念と思ってシャッターを切った。朱氏から届いたs写真が右である。中国の新興市街が、高層ビル街に変貌してゆくには、素晴らしい発展とは思うが、これで良いのかという思いもある。外国人が、日本にあこがれるは、昔の文化が残っており、新旧が混在して、一服の絵になると思う。50年経ったら、これらの建物は、老朽化してくるだろう。その時に、彼等は、どのような街づくりをするだろうかと思う。

2008 年古い家屋がある市街地　　現在の象山県中心市街地

高知に住んで50年。やはり庭のあるような家が良いと思い、40年を経た木造の家に住んでいる。中国人の心の内には、同じ思いがあるのではと考えながら、 実験的まちづくりをみてきた。また、レンガ造りの庭のある街づくりとなってゆくのではなかろうか。AIにより50年後の予測では、日本の将来は、田舎が繁栄するという。そうなってほしい。